

建築文化

KENCHIKU BUNKA APR. 1984 VOL.39 NO.450

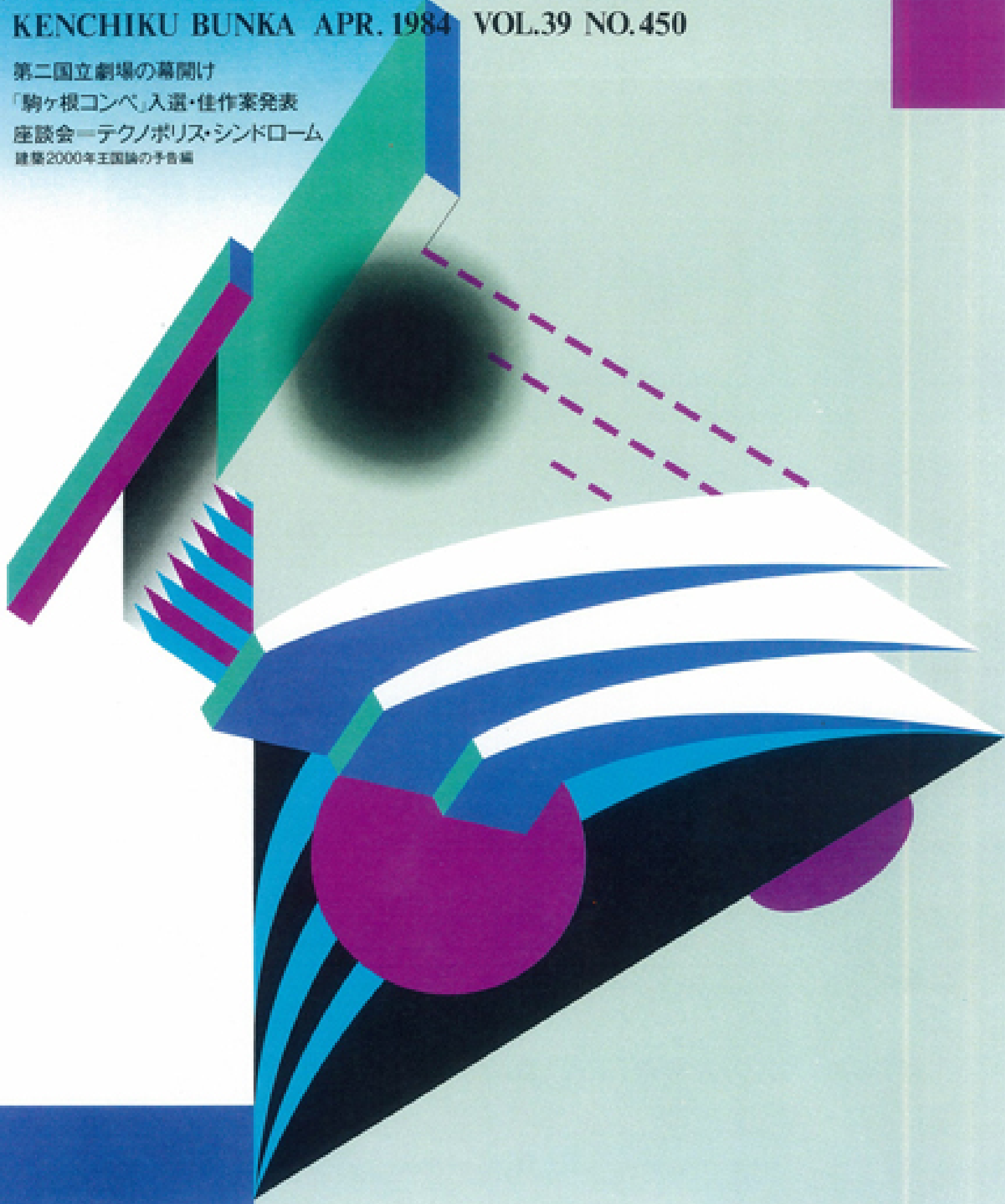
第二国立劇場の幕開け
「駒ヶ根コンベ」入選・佳作発表
座談会—テクノポリス・シンドローム
建築2000年王国論の予告編

ISSN 0013-7928
JAN 0013-7928

ADVERTISING INFORMATION

MANAGER Y. ITO
DISTRIBUTION MANAGER M. KIKUCHI

4



排水器材のQC化の試み ●安孫子義彦

排水の器材をその機能的側面、デザイン的側面の両面から総合的に捉え直そうとする試みを、筆者グループで行なったので、その一部を紹介したい。この一連の試みを“排水器材のQC化”と考え、多少おこがましいがつけられた部品を“QC部品”と称することとした。

QC化の第1は、部品情報をいかに設計・デザイン情報に継ぐかであった。すなわち、デザイナーがみて判りやすい部品の情報分類を試みた。分厚い管材のカタログ集からの部品選択は職人芸に近く、ますますデザイナーから敬遠されることを避けるためである。図-1は、排水器材を部位別に分けたチャートである。多かれ少なかれ排水の器材は、このブロックのひとつに位置づけられる。

次にQCコンセプトの機能的重要性を、点検、清掃、取り替えの三つの要素に置いた。これは、従来の排水器材に要望されていた「簡単に点検できないか」「もっと掃除のしやすいものはないか」「取り替えに手間のかからないものはないか」といった現場からの強いニーズに応えることが重要と判断したからである。

この結果として生まれたのが、写-1~3の立管継手部品である。写-1は、屋上部のヴェントキャップの部分を蓄式として頂部より清掃具を挿入できるようにしてある。写-2の中間継手は各方向の横枝管接続をすべてフランジ式にし、余りの部分を掃除・点検、あるいは満水テストプラグの挿入口としたものである。写-3は立管脚部であるが、両サイドに掃除

口を用意してあるときには通気管の接続も可能な形となっている。

QCコンセプトの今一方の重要点、建築的要素である。従来排水器材は、建築の壁や床の内側の見えない空間にあったため、意匠的デザインに触れることはほとんどなかった。写-4は床上排水口であるが、床の仕上げ材の長尺シートを巻き込み、床面と面一になるように工夫したものである。また写-5は、タイル仕上げの際の納まりを良くするため角形としたものである。いずれも排水と同じに中の目皿を外すことができ、掃除口をも兼用している。

また、先述した写-2の中間継手から清掃を行なう場合、壁面にかなり大きな点検口を開けておく必要

がある。写-6は、継手から直接壁を貫通した掃除口で、壁面には金属の化粧プレートのみしか露出せず、デザイン的な納めやすさを狙った製品である。

そのほか、工事のしやすさも一つの狙いである。排水の継手工事の場合、規定の勾配の確保に無理がある場合が多い。その際、往々にして立管継手のレベルがスラブ面ぎりぎりになったり、時にはスラブ内に埋め込まれたりする。そのニーズに応え、かつ器具性能を維持するため、写-2の中間継手の胴部にスラブ面の仕上げがレベルを示す横線を入れている。また、写-7に示すような偏心型アダプターソケットを用意し、努めてスラブぎりぎりまでの工事が可能なように配慮した。また、これには横枝管の呑み込み調節代を示すマーカーも鈎出している。

このように、写真でQC部品の特質を簡単に述べてきたが、このほかにも今後の増改築時の排水管の位置の変更、機能の変更に耐えうる継手、あるいは超高層化の中での新しい性能をもった継手と課題は多く残されている。

排水器材の全建設費に占める割合は、きわめて小さい。しかし排水が将来、建築に与える影響はきわめて大きい。この点を考えた時、建物の価値を保全するために、このような部材を導入することはそれほど不合理的なことではない。要は、建築デザイナーの決断ひとつとも思える。デザイナーの理解と評価を期待したい。

(あびこ よしひこ 建築家、ジェス)

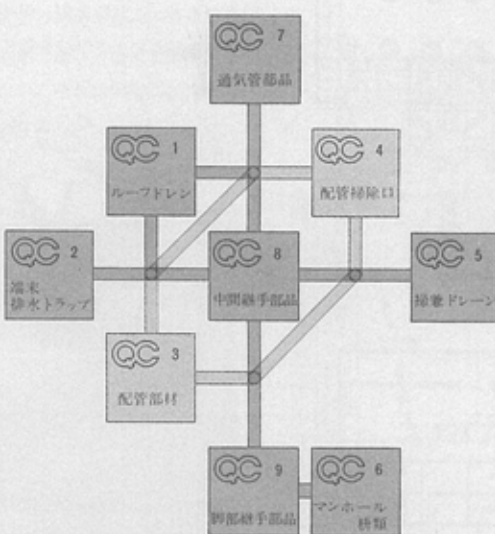
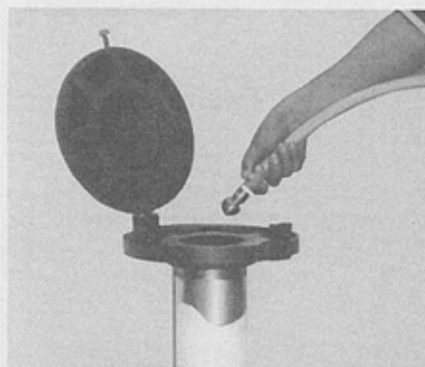


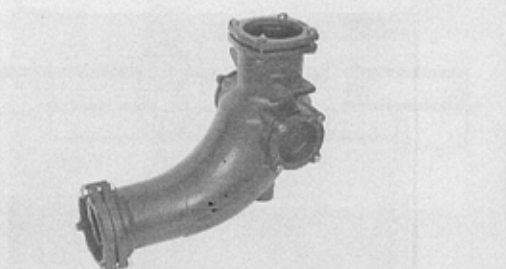
図-1 QCコンセプトチャート



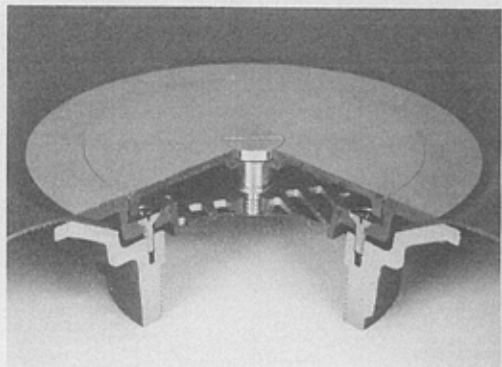
写-1 QC-7通気管部品



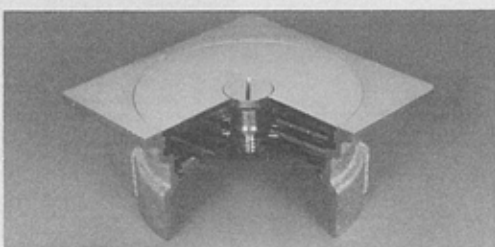
写-2 QC-8中間継手部品



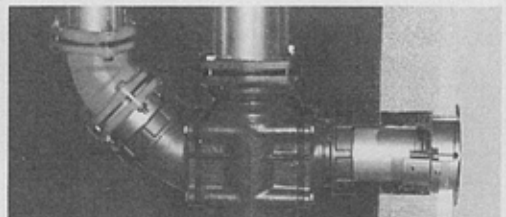
写-3 QC-9脚部継手部品



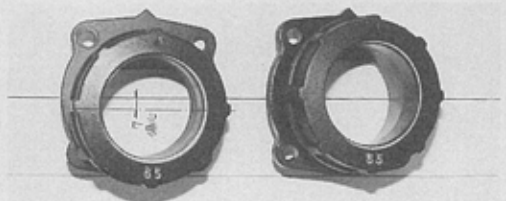
写-4 QC-5掃きドレン



写-5 QC-5掃きドレン



写-6 QC-4配管掃除口



写-7 QC-8中間継手部品アダプター (左: 偏心型, 右: 同心型)